２５周年
鳥取ハーナウ姉妹博物館

夏には「銀婚式」がありますが、私は98歳で17回目の日本訪問は無理でしょうね。

ハーナウ市のヘッセン人形博物館は古典古代とイギリスの木人形の重点のため、世界的に重要であると、世界人形クラブの会長が訪問で述べた。イスラエル旅行から帰って来た友人が、ハイファ市で私たちのポスター「世界一洗礼された双子」を見たと教えてくれた。しかし、日本の大規模なイベントのマネジャーが博物館に撮影しに来たと知ったのは、数年後だった。それは日本の大学都市の鳥取市の西尾市長から市制施行100周年プロジェクト「世界おもちゃ博覧会」のことで連絡があった時だった（西尾優市長は教員であり、私の日本にいる双子であった。私たち二人は、同年同月に誕生し、同年同月に教員国家試験を受け、同年同月にロシアの強制収容所に送られ、同年同月に解放された。しかし1989年の大博覧会を迎えた時分、西尾市長は車椅子の生活であった。私たちの双子の運命はそこで途切れてしまった…)。その展示のためにヨーロッパの歴史的なおもちゃが欲しかったため、1988年のヘッセン人形博物館の開館5周年に来ていただくことになった。契約を成立させるために、ハーナウ市長ハンス・マルティン氏が招かれ、1989年の博覧会開会にヘッセン博物館連盟会長クラス・ベッヒマン氏が招かれた。

1989年の競技施設での大きな展示会には、３週間で60 8000人以上のお客さんが来られていた！私たちが持ってきたサーカスや人形の家と店、18～20世紀のヨーロッパのおもちゃや人形の展示を準備したが、一番人目についたのは、紀元前5年のギリシャの人形だった。私の心を何よりもうっとりさせたものは「1889年の鳥取」、建物や遊んでいる子供、493人の市民を含むジオラマだった（同じ年に贈り物としてハーナウ市に届いた)。イベントが終了した後、記者団の前でおもちゃ博物館設立計画が発表され、ハーナウ側はヨーロッパ陳列室に協力をすると新設のおもちゃ博物館と提携する約束をした。

１９９５年７月５日の姉妹館協定は、おもちゃや人形の世話を見ながら展示し、地域と世代の違いを乗り越え、お互いの理解を深め、そして文化と平和の発展に協力することが共通の目標であると述べている。新博物館の保持団体は鳥取市（わらべ館）と鳥取県（わらべ歌）である。退職した管理事務公務員は館長となる。

二日後の七夕の時、ドイツの姉妹館はオーデンヴァルト山地やベルヒテスガーデン町からのおもちゃプレゼントでわらべ館の開館を祝う。

わらべ館の、ヨーロッパスタイルの古風な正面玄関を通るとモダンな本館とイベントホ

ールがある。その大きさは5000平方メートル以上である。車いすやベビーカーの方は、幅の広いスロープで上の階に上がることができ、ガラス張りのエレベータも自由に使用できる。上の階では、白兎が天井から８ヵ国語で挨拶する。壁面は祭礼、風習、おもちゃの変遷など、過去と現在が系統的に図示される。小型ショーケースは日本で伝わる風物（羽子板や蹴鞠など）が収納され、山本千恵子が作った和紙人形がそれらの使い道を分かりやすく教えてくれる。教育学者フレーベルやモンテッソーリの教具、土人形、レゴブロックの各コーナーがあり、体験もできる（博物館とは楽しみの学び舎である！）。からくり人形も実際に動きをみせてくれる。

2階は、足踏みピアノ、音が鳴る滑り台、お絵描き机、育児用台座などの実際に遊べる広場である。同ホール内の書箱、映像、音楽ライブラリーと合わせて、世話としつけに目配りがなされている。

１階では、昔の農家がそのまま再現されている。障子には童たちの舞う影絵が動き、唄を歌う。リードオルガンのある教室は、1900年頃の雰囲気を表し、昔の音楽授業を体験できる。次に、ボタンを押して唱歌を聞く部屋、そして作曲家の部屋。最初の人物はいうまでもなく、鳥取出身の作曲家岡野貞一である（「故郷」という曲はヘッセン人形博物館でも聞くことができる）。楽器（オルガンやピアノ）の部屋を出ると、今度は大きなスクリーンがあり、自ら前に出て歌い、遊ぶことができる。

増設されたいべんとほーるの外の広場には、日時計が滝の上に設置され、正午になると白兎伝説のメロディにあわせて物語の登場人物が回転する。

1995年11月、両館の提携協力の最初の果実が収穫された。ヘッセン人形博物館は、ヘッセン州文化財団の協力により、明治・大正時代の土人形の大コレクションを入手した。展示カタログにて、鳥取市、わらべ館、山本千恵子さん、渡辺先生に調査協力の礼を述べることができた。

1997年4月、わらべ館で山本千恵子さんが「ヴィルヘルムスバートの人形世界」をプレ展示した。その夏、この大ジオラマはヘッセン人形博物館に贈り物として届いた。御返しとしてヴィルヘルムスバート宮殿模型（18世紀民族衣装の鈴人形を含め）がドイツ交流ショーケースに展示された。

ヘッセン人形博物館の動画に私の報告講演「小空間に広がる文化史」を添え、服装、住まい、家事、買い物を考察し、おもちゃが教育、社会史、歴史、技術発展の反射鏡の役割を担ったこと、また、遊劇と人形が世界の人々を繋ぐ使者であると旨を述べた。市当局や鳥取県の市町村の文化活動に日々接する方々200名が招かれた。ヘッセン人形博物館の創

設時から全分野で実踏してきた博物館ボランティアに関する報告させていただいた。

わらべ館のボランティアは、1999年大石清人館長により統合的に具体化された。ボランティア応募者の初歩的な教習では、館内の案内、説明、遊劇指導、質疑応答について、そして大切なことは、大人子供の入館者に対する親切なサービスであることを学んだ。次の実習研修では、来館者との直のふれあいである。ボランティアの要員の第1号は2000年4月に就任した。交通費が支給され、仕事道具と控室があてがわれる。仕事内容は、館の情報を常時更新し、定期的な会合の席で成果や問題点を報告しあうことである。ただし、会計、販売、清掃、博物館教育、学問研究はボランティア任務に属しない。日本であまり知られていない博物館ボランティアの第1回体験報告の中で、館長は「ボランティア制度の継続は両方の利益になる」と述べた。

1999年に大石館長は訪問団と一緒にヘッセン人形博物館に訪れた。そのドイツ旅に関して歌書を作った。

異邦の館

鳥取生まれの和紙人形

訪ぬる我がに何ぞ語らむや

（黄葉、大石清人、2000年）

2000年に「ヘッセン人形博物館提携5周年」の展示会が開かれた。私からのプレゼントは3点でちょっとした古いコレクションもあった：1点はおよそ2000年前のローマ時代の牽引おもちゃであるこぶ牛、残り2点はギリシャの小さな陶磁器とローマ時代のガラス製哺乳瓶であった。ハーナウ市では、障子に似ている木枠の中に絵と文書で鳥取を描き、傘踊り、流し雛、陶芸人形、紙人形、木製の麒麟獅子などを表現する。

わらべ館の企画コンセプトが足踏みで採決して了承された。毎年およそ14万人の入館者を迎え入れ、学校や幼稚園から団体客も多い。教育面に興味がある大人の来館者は特別講演で博物館の学際的な活動の研修や成果について学んだ。その中には作曲家の岡野貞一に関することもあった。

1998年～2005年の私の講演は、ヨーロッパ関連であった：「ヨーロッパおもちゃ人形の歴史」、「ハーナウ市とグリム兄弟」、「20世紀のドイツ子供時代」、「ドイツの民族衣装」、「わらべ館ヘッセン人形博物館姉妹提携10周年」。

2001年、鳥取市とハーナウ市の都市提携の協定にちなんで、両博物館のこれまでの交流過程の解説があり、それと並行して、写真集「ハーナウ散見」が人の目を楽しませた。

2002年、私は寄贈品のショーケースに紀元1～3世紀のパルティア地方の骨組み人形とロ

ーマ時代の哺乳瓶（２つ目）を寄贈した。

2003年、ヘッセン人形博物館は創立20周年を岡田総領事のご支援により、博物館の周りで日独友好祭を開催した。ワークショップ、紙人形、押絵、講演、生け花、剣道、茶道、太鼓などを含め、姉妹館に関しての写真展を開いた。

2005年の七夕で式典行事「姉妹提携10周年」を開催し、わらべ歌のプログラムとわらべ館長、知事、市長、山本千恵子さんと私（日本語で！）の講演があり、150名で発足したばかりの鳥取・ハーナウ友好協会のメンバーも出席された。

ハーナウ市の博物館は、昔風にきれいに折りたたんだお子様用着物の贈り物をいただいた。七五三の日の参拝用にあつらえた晴れ着である。

2007年に岩槻市の田口物産が専ら知的障害者と共同製作した、各種サイズのだるまは、片目だけ着色し、近いうちに博物館で日本の展示室を開けるようにと願いをかけた（残念ながら、右の目はまだです)。

2015年に贈った、設立20周年への私からの贈り物のヒュッテンベルクの民族衣装人形は今でも交流ショーケースに置いてある。渡辺先生が関連の情報を訳してくださった。

ヘッセン人形博物館は、わらべ館との姉妹館提携の以前にも、1995年7月に日本の祭り人形とおもちゃ人形を展示していた。しかし、1989年に始まったつながりと1995年に始まった交流によって、多くの贈り物や貸し用品、音声カセットや143個4のビデオ動画と専門知識サポートにより、日本の特別展示が可能になった：1991年「日本のこけし」、1992年「日本の人形」、1994年「日本のこけしと浮彫絵」、1995年「土人形、日本の陶芸人形」、1996年「絹への顔と羽子板」、1997年「山本千恵子の紙人形」、1998年「こけし、日本の木製人形」、1999年「鳥取のおもちゃと伝統」、2002年「江戸独楽」、2018年「日本の凧」そして2011年のゾンネベルクドイツおもちゃ博物館での私の展示「日本の伝統おもちゃと祭り習慣」。伝統人形、歌舞伎ミニチュア、伝説の生き物などについて情報を集めるのは楽しかった。昔の日本の眉毛流行りや家の門に「来ましたよ」という伝言を残す泥棒の話など聞いたことがなかった。展示冊子の楽譜欄に歌詞のドイツ語訳がついており、それでカセットテープで岡野貞一の「ふるさと」「春が来た」や「白兎」「金太郎」「桃太郎」の童歌を聞きながら一緒に歌うことができる。

2011年3月11日、マグニチュード9.0の東日本大震災において津波と福島原子力施設内の炉心事故をが起きた。日本史上、最悪の自然災害である。お見舞いの連絡をしたら、「私たちは乗り越えますよ」という返事が戻ってきた。

7月にリフォームされたわらべ館では心地が良くて、新しい発見もたくさんあった：ヨ

ーヨーと遊びに招く等身大の子供像、エルツ山地の木製動物（ライフェン動物)、そして玄関ホールでの鳥取ハーナウ交流の歴史。

2015年の神戸での私の WHO 講演会に、姉妹都市からわらべ館の館長や何人かの職員を含めて16人の友人が来られた。1989年に鳥取とハーナウの間に「おもちゃでの友情」を築けたらなと思った。2020年にわらべ館とヘッセン人形博物館の姉妹館関係２５周年に至るまでに、こんなにも沢山の繋がりができるとは、思ってもいなかった。イキイキした姉妹館関係には、9700ｋｍの距離でも壁になりません！

ゲルトルート　ローゼマン